



新潟大学理学部附属臨海実験所

写真右 旧建屋(1954～1984) 写真上 現建屋(1985～)



同窓会に力をお貸してください

理学部同窓会会長 野 本 憲 雄

5月14日(月)の夕方、同窓会が主催して「特別講演会」を開催しました。この講演会は、昨29年度から、理学部が、それまでの6学科をなくして「理学科」1学科に改組されましたので、新入学生の皆さんがその後、数学、物理、化学、生物、地学など、何を勉強したらよいか決める際に役立てて頂きたいと昨年から実施したものです。

昨年は、113番元素、「二ホニウム」について工藤先生にお願いしてお話を頂きました。しかし、参加者がきわめて少なく、工藤先生にも大変失礼な状況でしたので、開催時期や時間、場所などを工夫して、今年こそはと期待して実施したところでした。

今年は、生物学科出身の同窓生で国立科学博物館人類研究部研究員の神澤秀明博士にお願いして、「DNAからみた日本人の起源と成立」という演題でお話を伺いました。お話は大変興味深く聞かせて頂きました。

参加者は昨年からみれば少しは増えたようですが、肝心の新入学生の皆さんの参加が相変わらずとても少なく大変残念に思っています。この講演会はそもそも必要がないのか、どういう講演なら役立てて貰えるかなど思案しています。もっとも、理学部では、前期日程の入試で、選抜方法にABCの3方法を設け、受験生が志向に合わせて選択できるようにし、入学後の教育にも工夫されておられ、2年次後半の「分野プログラム(数学、物理など7分野あり、従前の学科のようなものか?)」の選択では学生さんの希望に応えることができているとのことですので、喜ばしいことだと

思っています。

この会では、同窓会が支援している「グローバル人材プログラム(海外英語研修)」に参加してオーストラリアの大学に短期留学された学生さんにも報告して頂きました。この事業は湯浅先生のお骨折りで希望者が少しは増えているとのことですが、今後に期待しています。

卒業生の皆様が大学を訪れて、理学部について知りたいと思われてもそれにお応えする機会を設けていないのは大きな問題だと思います。総会(役員会)では、「理学部との懇談会」を3年程前から設けて、理学部の現状と課題などを伺っていますが、こういう場にご案内するのも一つの方法だと思います。このほかにも、今後「理学科」の卒業生が出た後の支部をどうしたらよいかということも差し迫った問題です。

ところで、今年の「新潟大学・全学同窓会・交流会記念講演会及び懇親会」は10月20日(土)にANAクラウンプラザホテルで開かれますが、今年のは当番は「理学部同総会」です。「記念講演会」は、国立極地研究所の本吉洋一教授から「南極における地球科学研究の最前線」(仮題)というお話を伺うことにしています。本吉教授は南極観測隊に9回参加、うち3回は隊長を務められた方です。興味深いお話がお聞きできると思います。是非とも多くの同窓会員の皆様に足を運んで頂きますようお願い申し上げます。





ご挨拶

理学部長 前 野 貢

同窓会の皆様には、日頃より大変お世話になっております。理学部は、2017年度から、1学科（理学科）7主専攻プログラム（数学プログラム、物理学プログラム、化学プログラム、生物学プログラム、地質科学プログラム、自然環境科学プログラム、フィールド人材育成プログラム）で新たなスタートを切りました。1学科となった新理学部では、入学後1年半の間、学生は、志望する専門分野にかかわらず6つのクラスに配属され、理学の共通教育を学びます。今年度は、改組2年目となることから、初めて理学科学生のプログラム選択が行われるなど、重要な年度です。本会誌では、改組から1年過ぎた現在の状況をお知らせします。

●改組後1年が過ぎて

今年度は、207名の新生入生として迎えました。昨年度の入学生を含めると、もはや半数以上の学生が新カリキュラムの学生になったわけです。これに伴い、理学科のクラスは12クラスとなりました。2年生は、第2タームが終了する8月上旬にプログラム選択希望書を提出しますが、それまでに各学生はアドバイザー教員と面談をおこない、自分が進むべき進路を熟考します。改組の計画中に1学科制の導入を高校に説明に伺ったときに、進路指導部の方々から多く出た懸念のひとつに、学生が入学後に、希望している専門分野のプログラムに進学できないのではないかとありました。しかし、実際に今年の2年生に対して志望プログラムのアンケートを取った結果、現在のところ、各プログラムへの進学希望者数は、それぞれの受入れ上限数の範囲に概ね収まっていることがわかりました。今年度の新生入生に対しても同じアンケートを取り始めていますが、やはり志望プログラムは分散している傾向があります。志望プログラムが分散する理由の一つに、後述のように、改組に伴って行った入試制度の変更が挙げられると考えています。

●入試制度の変更とその解析

理学部は、1学科制の導入に合わせて、前期日程の入試を3つの選抜方法（A選抜、B選抜、C選抜）に括りました。これらの入試選抜区分には、それぞれ募集人員目安があります。A選抜は数学重視型、B選抜は総合型、C選抜はフィールドワーク志向型の選抜を行い、多様な指向性をもつ学生をバランスよく入学させることを狙っています。受験生側から見ると、自分の得意な科目を入試科目として選択することができ、また入学後の分野選択と選抜方法は無関係ですので、時間をかけて将来の方向を検討することが可能です。全国的に、理学部で1学科制を採用している大学は少数ですが、その中でも、新潟大学方式の入試は他に例を見ません。

2017年度の入試では、全体の志願者数は増加したものの、前期日程の志願者が減少し、志願倍率1.7倍となりました。しかし2018年度の入試では、前期日程では志願倍率2.1倍に回復しました。改組に伴う新しい

入試制度の公表は受験の1年前であったため、最初の年度の受験生の選択に影響を与えた可能性があったと推測されます。今回の入試では、新制度への理解が一定程度高まったと思われますが、引き続き、改組後の理学部の状況、入試の結果などを、高校側に丁寧に説明していきたいと考えております。

●臨海実験所の教育拠点再認定について

佐渡の達者にある理学部附属臨海実験所は、2013年度から5年間、教育共同利用拠点に認定され、日本全国の大学生、研究者の教育・研究に貢献してきましたが、今年度(2018年度)から5年間、新たに教育共同利用拠点「佐渡島生態系における海洋生物多様性・適応生理生態学教育共同利用拠点」として再認定されました。拠点として認められたのは、これまで、安東実験所長を始め、関係教員・職員の多大な努力があったからです。現在、理学部附属臨海実験所、農学部附属演習林、朱鷺・自然再生学研究センターを統合して、研究・教育活動のコアとなるようなセンターを設置する検討が進められており、これにより、佐渡の自然「森・里・海」をテーマとする研究・教育の融合、発展を目指しています。今後の実験所の発展が期待されます。

●高校生のためのシンポジウムの開催について

大学の理学部は、最先端科学情報や科学のおもしろさを地域の若い世代に継承していく役割を担っています。理学部では、数年前から、新潟県の中高校生、一般の方を対象として、著名な研究者によるシンポジウムを開催しています。第1回は新元素ニホニウムを発見した九州大学の森田浩介先生(2016)、第2回はニュートリノに質量があることを証明した東京大学の梶田隆章先生(2017)、そして第3回はオートファジーのしくみを解明した東工大の大隅良典先生(2018)にご講演をいただきました。3回とも、高校生による直接の質問を受け付ける時間を長く取りました。黙って聴くだけの講演とは異なり、高校生たちが目を輝かせて積極的に参加する、楽しい、貴重な機会となっています。理学部としては、このようなシンポジウムを継続的に開催することで、将来の研究者を目指す次世代の若者たちを啓発できればと考えております。

●最後に

「変化することを可能にする」新理学部の体制は、今後も時代の推移に対応して、さらに良い方向へ「変化する」必要があります。もちろん「変化ありき」ということではありませんが、超少子化の時代を迎えている日本において、柔軟な対応のできる組織作りは重要です。日頃よりご支援をいただいている同窓会の皆さまには、これからも理学部の近況を報告させていただき、ご理解を賜りたいと存じます。今後も、引き続きご支援をいただけますようお願い申し上げます。

数 学 科

数学プログラム

プログラム長 田中 環

本年3月には数学科4年生42名が卒業し、その内の18名が進学で、内16名が本学の大学院に進学しました。また、5名が教員となり、6名が情報通信関連企業へ就職しました。博士前期課程数理科学コースの2年生13名は、2名が後期課程へ進学し、11名が就職しました。そして、4月には2期生の理学科1年生が入学して、理学部学生の半数近くが理学科の学生となりました。

理学部では、これまで教員免許として数学と情報の2科目を同時に取得できていましたが、2年生以下の学生にとっては、情報の免許を取得するには難しくなりました。しかし、多くの数学の考え方が社会のあちこちに利用され、他の科学や工学と一緒に社会の仕組みに組み込まれています。その意味では、数学以外のサイエンスを学ぶことのできる現在の一学科制はとても将来が楽しみです。例えば、共通ベーシック科目でアクティブ・ラーニング、情報社会論、情報産業論や基礎演習、基礎実習を学ぶことができます。また、将来の国際的な活躍も視野に入れて、理学部の専門科目として海外研修や海外英語研修などが履修できるようになっています。その他、インターンシップ特別実習で企業での就業体験を在学中に行えるようになっています。今年度は数学科からは3年生3名が派遣を希望して夏休みに体験する予定です。これらの取り組みには多くの卒業生からご協力を頂いており、この場を借りて御礼申し上げます。

さて、現在、理学部には、海外の国際交流姉妹校から1年間の短期留学生がいて一緒に勉強しています。台湾からは3名来ています。2名は女子学生で数学科へ、もう1名の男子学生は物理科で学んでいます。この3人は8月に帰国しますが、9月末には新たに4名の留学生が台湾からやってきます。内、2名は数学科で受け入れます。この他、7月末にはさくらサイエンスプランで中国と台湾から19名がやってきますし、来年の2月にも東アジアの国々から留学生を受け入れて本学の学生と交流する企画を計画しています。

さらに、数学科ではキャリアアップを図るため、理学部同窓会員（卒業生）とも連携して行事を行っています。まず、7月と11月に数学科講演会を開催します。7月11日（水）の講師は、平成18年3月学部卒業の佐藤慶太さんと平成16年3月学部卒業（平成18年3月大学院修了）の江村英里花さんです。また、10月13日（土）には、新潟大学WeeKの一環として「数学科卒業生と学生・院生の交流会」を開催します。是非、同窓会の皆様にもご参加くださるようお願い致します。今後とも変わらぬご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



物 理 学 科

物理学プログラム(物理学科)のこの一年

プログラム長 吉森 明

物理プログラム(物理学科)では、今年1月に新しい特任助教として、関澤一之先生を御迎えしました。関澤先生は、原子核理論がご専門で、正式な所属は超域学院になりますが、物理プログラムの教育に携わって頂くこととなります。研究の業績の大変高い方で、3月に行われた物理学会で、中村誠太郎賞を受賞されました(<https://www.niigata-u.ac.jp/news/2018/41200/>)。

また、最近のイベントとしては、毎年恒例のケルビン祭が6月7日木曜日に行われました。今年で16回になります。この日はちょうど第1タームの終了と第2タームの開始の間の休みの時期で、当初心配された天気も当日は快晴になり、盛会となりました。午後1時半から理学部B303講義室で、大学院説明会、中山賞・物理学科同窓会奨励賞授与式、研究グループ紹介、学生対話集会が行われました。特に「中山賞」は物理学科卒業生の寄付を元にした賞、「物理学科同窓会奨励賞」は同窓会の支援によりもうけられた賞で、今年度も全部で6名の成績優秀な4年生に授与されました。これらの賞は毎年学生の励みになっていると思われますので、同窓会の支援にこの場を借りて御礼申し上げます。午後5時からは、理学部A棟正面玄関前でバーベキュー大会が行われ、各研究グループの凝った料理が参加者に振る舞われました。

また、これは物理プログラム(物理学科)だけのことではありませんが、今年の新潟の冬は大変な雪でした。特に、センター入試の前日、1月12日は大雪になり、市内の交通機関が麻痺し、大学が一日休みになりました。幸い、その日は授業がなく、学生は大学に来る必要はありませんでしたが、教員や事務員は特別休暇になりました。その後も、雪は降り続き、雪が融けるのに一ヶ月以上もかかりました。

昨年度から始まった新カリキュラムの学生は今年度2年生になります。入学時点ではプログラムに所属していない理学科の学生がこの10月に配属になります。物理プログラムでも新しい学生を迎えて、物理学の面白さを伝えようと教員一同張り切っています。これまで1年生から物理学科に所属していたのに対し、2年生の第2学期から物理プログラム配属になり、大きく変わることになりますので、試行錯誤の部分はあると思いますが、教職員一丸となって頑張っていきたいと思っています。

化 学 科

化学プログラム

プログラム長 長谷川英悦

はじめに、平成29年度化学科卒業・大学院化学コース修了生の進路状況をご報告します。学部卒業生39名は進学25名と就職14名(企業、公務員ほか)、大学院前期課程修了生13名は進学2名と就職11名(企業、公務員)でした。今年度は、化学科3年生38名、4年生36名、大学院前期課程1年生24名、2年生13名、後期課程1年生2名、

2年生4名、3年生4名、が在籍しています。また、化学プログラム選択の推薦入試入学生とフロンティアスタディプロジェクト(FSP)採択生(前期日程合格の化学プログラム希望者から選抜)は、合わせて新入生11名と2年生11名がいます。化学プログラムでは、推薦・FSP生への独自の支援も行っています(研究実習体験、研究室訪問など)。今年のハイライトは、2年生のプログラム配属でしょう。2学期には、初めての化学プログラム2年生が誕生することになります。理学部が実施している配属希望調査では現3、4年生より多くの2年生が化学プログラムを希望している様です。

化学プログラムでは、学生と教職員の交流を深める行事や教育研究支援の取組を様々実施しています。今年も、「新入生歓迎会」(推薦・FSP・3年次編入生向け)と「春のタテコン」が盛大に開催されました。また、近々に「夏のビール祭り」も予定されています。他には、学生の生の声を聞く「学生・教員懇談会」、学習支援のための「学習相談室」、研究情報提供のための「先端化学セミナー」、および化学プログラム教員が中心となって運営しているユビキタスグリーンケミカルエネルギー連携教育研究センター(<http://chem.sc.niigata-u.ac.jp/~gc-center/>)主催の「研究シンポジウム」などがあります。

さて、教員異動については、昨年12月に無機化学研究室(核化学分野)の大江一弘助教が大阪大学へ転出されました。本学では今年度より新たな教員人事制度が導入され、現在は教員採用の機会が激減しています(数年前の人事凍結のニュースは世間を騒がせたが)。現在の化学プログラム担当教員14名(教授7、准教授6、助教1)は、技術職員2名と事務補佐員1名の協力を得ながら、学生教育、研究推進と社会貢献(高大接続や地域連携など)に努めて行きます。化学科同窓の皆様には、今後ともご支援を宜しくお願い致します。

生物学科

生物学プログラムの近況

プログラム長 内海 利男

生物学科の近況をご報告させていただきます。先ず学生は、本年3月に18名が生物学科を卒業し、そのうち11名が本学大学院へ、1名が他大学大学院に進学しています。本年度は理学部改組後2年目を迎え、4月に理学科生として新入生を迎えています。理学部改組後のフロンティアスタディプロジェクトと推薦入学生は入学当初より希望するプログラムへの配属が確約されていますが、平成30年度理学科入学生の内、生物学プログラムへの該当者は10名でした。さらに3年次編入学生としてモロッコからの留学生が1名加わりました。なお、10月には理学科2年生の中から生物学プログラムを希望する学生が当プログラムに配属される予定です。事前調査では、旧生物学科定員数(20名)をはるかに越える学生が当プログラムを希望しており、当プログラムの活性化が期待されます。教員のメンバーには変更はありませんが、平成30年の5月より井筒ゆみ先生が理学部唯一の女性教授に昇任されました。

昨年度を振り返りますと、改組1年目にクォーター制が導入され、当プログラムは運営面で様々な苦労が

ありました。少ない教員間で協力し合い、のりきった1年間でした。そして、改組後の新2年生を30名まで受け入れ可能にするため、実習設備面の補強やスペースの確保などにも取り組みました。春には、入学したフロンティアスタディプロジェクトと推薦入学生、および在校生・教員との懇談会を行い、さらに彼らを対象とした研究室案内を実施しました。夏には、大学院も含めた生物学科/プログラム全学年に加え、一般理学科生にも参加を呼びかけて夏の生物学懇親会を開催しました。この会合では各研究室の研究内容をポスターで発表し、新入生と意見交換をする等、交流を深めました。また8月には、生物学科同窓会の協力を得て、一昨年に引き続き高等学校生物学教員と生物学プログラム教員間の交流会を開催し、西川学科長より理学部改組1年目の状況の説明や、酒井教授より植物学の視点からの生物学の解説があり、意見交換により交流を深めました。そして秋には、昨年度から新たに生物学総合演習科目を開設しました。3年生が10~12月に、2つの研究室に仮配属し、研究室での実験を体験する演習です。今後も学生の生物学への勉強心を向上させる取組を組み入れプログラムの活性化に努めていく所存です。同窓生の皆様の一層のご支援をお願い致します。

地質科学科

地質科学プログラム

プログラム長 小西 博巳

今春には、19名の学部学生が地質科学科を卒業しました。内、10名は大学院に進学し、引き続き、新潟大学で学んでいます。6名は、企業に就職、2名は公務員となりました。修士課程では、9名が修了し、4名が地質系企業に就職、4名が公務員、1名が博士課程に進学しました。地質コンサルタント会社など、大学で学んだことをストレートに生かすことができる場所に就職するケースが多いのが、地質科学科の大きな特徴です。

理学部改組により地質科学科から理学科地質科学プログラムに変わって2年目となりました。夏休み明けに(2年生の後期から)、改組後はじめて地質科学プログラムに学生を迎えます。学科ごとの入試ではなく、学部単位で学生を入学させる方式をとったところでは、地質科学を専攻する学生が減少する傾向があります。新潟大学でも地質科学プログラムに何人来るのか予想できず、大変心配していました。しかし、最近行われた希望調査では、22名が地質科学プログラムを希望しており、何とか改組前の定員(25名)近くの学生を迎えることができそうです。地質科学全般の体系的教育とフィールドを重視した教育の伝統が学生にとっても魅力となっているのだと思います。安易に学問分野をくっつけたり、離したりしても新しい学問や教育は生まれないので、オーソドックスな教育こそが基本に据えられなければならないと思います。

地質科学の普及を目的として、5月にサイエンスフェスティバルを行いました。10月には、新潟大学WEEKの企画で「地質祭り」を学生が中心となって取り組む予定です。大学祭では、大学院生が企画する「秘酔」には、毎年、卒業生も集まり、プチ同窓会となっています。春の地学ハイキングは、地質科学科も後援して

きましたが、伝統的に準備の主体が2年生だったので、学部改組により実施が難しくなるのではないかと心配しておりました。しかし、今年も、学生が中心となって準備し、100名以上の参加者を集めて盛大に行いました。

学科予算が大幅に減少し、様々なところで「節約」をせざるを得ない状況があり、学生の皆さんにも大変不便な思いをさせています。学科予算で購入してきた雑誌を数年前に購読を中止しました。紀要も同窓会の援助がなければ発行できません。文科省からの運営費交付金が大学法人化以降、毎年1%（約100億円）削減されてきたことの影響で、すでに研究教育の現場は我慢の限界に達しておりますが、教育行政も遠くから改められるだろうと楽観的に考えています。今後とも皆様のご支援を賜りたくお願いいたします。



自然科学科

自然環境科学プログラム

プログラム長 松岡 史郎

理学部改組で一学科制となってから今年で二年目を迎えました。一学科制への移行は学生・教職員ともに近年あまり経験したことのない大きな変化でしたが、特に混乱もなく新たな理学部がスタートしました。このような大きな変化の中、昨年度は34名の学部4年生と14名の修士課程修了者を輩出しました。皆さん進路は様々ですが、新たな環境で元気に頑張っているとの便りもたくさん届いております。

その一方で、一学科制への移行により気になる事態も生じています。それは1、2年生（理学科生）と3年生以上の旧学科生との関わりが希薄になりつつある点です。自然環境科学科（自然環境プログラム）は、伝統的に下級生と上級生の関係が非常に密であり、学科全体として一体感が強いという特徴がありました。この一体感は、上級生が中心となって開催していた各種の学科行事・活動によって育まれていたと思います。その行事の一つに、毎年春に学生主体で行っていた歓迎遠足（弥彦・角田山系）があります。この遠足には学部学生だけでなく大学院生も参加していましたが、弥彦・角田山系でみられる様々な自然現象を先輩達が新入生に対してわかりやすく説明することで、学科で行われている教育・研究と自然環境との関連についての理解を深めることがこの遠足の目的でした。さらに自然環境科学科では、学部生が中心となり気象系、河川系、野生生物系、環境問題系などの自主ゼミ活動も活発に行っていました。自分たちで興味を持った自然現象を科学の観点から学習し、さらに現場において調査・観察を行うことで得られた様々な環境情報を外部に発信するのがこのゼミの目的でしたが、この活動の中心になっていたのは3年生で、1、2年生を積極的に引っ張ってくれていました。ところが一学科制になったことで、3年生以上の上級生と下級生とが付き合える機会が減ったため、これら学科独自の取り組みを続けていくことが難しくなりつつあります。

このような状況を憂慮した3年生の有志が立ち上がり、学科教員と学生、さらには1、2年生との交流を深めるためのサマコンを復活させてくれました。サマコンというのは、毎年七夕の時期に自然環境科学科の教員と学

生とが集まって行う交流会で、改組後には開催されていませんでした。自然環境科学プログラムに興味がある理学科生は誰でも参加できる会としましたので、1、2年生と学科生・教員間の交流だけでなく、どのプログラムに進むかがまだ決まっていない学生にとっては、プログラムを詳しく知るための良い機会にもなったと思います。



フィールド科学人材育成プログラムいよいよ本格始動

プログラム長 本田 明治

フィールド科学人材育成プログラムは、平成29年度に理学部改組に伴って新しく立ち上がったプログラムで、2年目を迎えました。改組に伴いプログラムへの学生配属は2年次後半（30年度10月）からとなるため、現在は受け入れ体制の準備を着々と進めているところです。本プログラムの最大の特徴は、理学部と農学部の教員が協働で授業や実習を担当する全く新しい学部横断型プログラムであることですが、両学部とも組織の在り方、運営の進め方、学生教育の方針にそれぞれの文化があるため、プログラムの発足にあたって、また発足後の学生受入に向けて、現在もひとつひとつすり合わせを進めてプログラムの体制作りを進めております。勿論、現時点でも多くの解決すべき問題を抱えておりますが、学生にとって魅力のある新しい教育プログラムを築いていく中で、両学部の教員間の連携も非常によく、いずれもよい形で解決していくものと期待されます。

当プログラムの所属学生はまだおりませんが、1、2年生向けのフィールド科学に関わる科目は既に開設されています。中でも1年次第2タームに開講される総合力アクティブ・ラーニング（フィールド系）は、さまざまな分野のフィールド実習の基礎を学び、実際にフィールドに出て実習を行い、実習成果を発表会で報告する内容で、昨年度は受講者数も多い人気科目となり、学生による授業アンケートでも非常に高い評価を頂きました。また新しいプログラムということもあり、昨年度は広報活動も積極的に行いました。5月には主に新入生を対象とした「理学系フィールドナビ」を開催して、教員のみならず学生・院生も総動員でプログラムや研究室の紹介を行いました。このフィールドナビは、フィールド関連分野全体を盛り上げる目的もあり、地質科学プログラム・自然環境科学プログラム・臨海実験所、農学部など学内の関連部署にも参加頂き、大いに盛り上がるイベントとなりました。またオープンキャンパス、高校教員向けのアドミッションフォーラムなどでも当プログラムをアピールしてきました。本年度はプログラムのリーフレットも作成、6月には農学部のイベントと連携して理学系フィールドナビを開催し、今後もオープンキャンパスなどさまざまな機会、積極的に広報活動を進めていく予定です。

いよいよこの10月から理・農両学部から、20数名の学生を迎える予定です。我々も非常に楽しみにしておりますが、まずは魅力あるプログラムをしっかりと築き上げていきたいと考えております。同窓会の皆様には当プログラムの今後に期待して頂き、また暖かいご支援を賜りたくお願い申し上げます。



後援会会長 渡 邊 俊 弘

新潟大学同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また平素は後援会の活動にご協力を賜り厚く感謝申し上げます。

理学部の平成29年度卒業生の進路状況は、約半数が大学院へ進学、約4分の1が民間企業への就職、次いで公務員、教員となっておりますが、就職にあたり学生達が高い期待と評価を頂けるのは、ひとえに先輩である皆様方の社会でのご活躍の賜物であると大変感謝いたしております。

さて、理学部は昨年度の改組により「1学部1学科7プログラム」に変更されましたが、新入生はもちろんのこと在校生におきましても、先生方の熱心なご指導のもと、しっかりと勉学に励んでいるようです。保護者といたしましても、先生方とのご協力のもと、しっかりとバックアップしていきたいと思っております。

また今年も、昨年に引き続き国際交流事業、キャリア・フォーラム等素晴らしい企画も多く予定されており、先日開催されたノーベル生理学・医学賞を受賞された大隅教授をお招きしてのシンポジウム也大盛況でした。先生方のご尽力に感謝するとともに、後援会としまでも引き続き陰ながら協力していく所存であります。

同窓会会員の皆様には、学生が自信を持ち社会に貢献できるようご指導そして応援して頂けたらと思っております。

今後とも皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

全学同窓会からのお知らせ

◆新潟大学・全学同窓会交流会

平成30年10月20日（土）15時30分よりANAクラウンプラザホテル新潟にて新潟大学・全学同窓会交流会が開催されます。今回は理学部同窓会が幹事役を務めます。国立極地研究所教授の本吉洋一先生をお招きし、「南極における地球科学研究の最前線」と題して、南極研究の最新の話題についてご講演いただきます。理学部の教員、卒業生も南極研究に大きく貢献していますので、調査活動や研究内容を知る良い機会です。ご都合のつく方は是非ご参加ください。詳細は全学同窓会HPをご覧ください。

◆雪華支援事業について

「新潟大学の発展と社会への貢献に資する」という全学同窓会の運営理念に合致する事業を支援するため、2008年度から公募型の雪華支援事業（1件あたり50万円以下の助成）を実施しています。2017年度は24団体に総額330万円の支援を行いました。2018年度も7月31日を締切とする公募を行い、総額350万円を助成いたします。これまでの採択事業の詳細は全学同窓会HPに公開されています。

◆賛助会費納入のお願い

前述の「雪華支援事業」の予算は同窓生からの賛助会費を原資としています。応募件数は年々増加しており、採択された事業は、母校のブランド価値の向上、好感度アップにも貢献しています。事業拡大のためにも賛助会費の納入をお願い申し上げます。

首都圏同窓会

と私

首都圏支部の近況

地質鉱物学科 昭和60年卒 栃原 真与子

私は理学部首都圏支部の会計を担当しています。今回は理学部首都圏支部の近況についてお知らせします。

理学部首都圏支部では、毎年6月下旬に総会を開催しています。今年も6月23日に東京新潟県人会館にて「第33回新潟大学理学部首都圏同窓会」を開催します。当日は総会だけでなく前野貢理学部長に大学の近況をお話いただき、その後、第26回のサイエンスセミナーとして、理学科俣野善博先生より「元素が彩る有機化学—合成から応用まで—」、化学科昭和43年卒松井猛さんより「理学的思考で工学を生きる」というテーマで講演をしていただきます。首

都圏支部の集まりではありますが、交通の便がよくなり日帰り参加も可能になったため、今年から首都圏以外の方へも案内状を送り、首都圏支部の活動を多くの方に知っていただくという試みも始めています。

まだ参加したことがないという同窓生の皆さんも、まずは、サイエンスセミナーから気軽に参加してみてください。もちろん、懇親会へのみの参加も可能です。この会報が発行される頃には今年の総会は終了していますが、ぜひ来年はご参加ください。お待ちしております。

支 部 だ よ り

数 学 科

支部長 武石 文雄

平成30年度は、4月14日に役員会を開催し、スタートしました。ここで29年度事業実施報告、29年度収支決算報告を行うとともに、30年度事業計画及び平成30年度予算案を作成いたしました。6月10日には、支部総会に代わる理事会を開催し、これらの報告、案についての承認をいただくとともに、10月に行われる在校生と卒業生との懇談会についても審議していただきました。

また、これらの会議で支部の役員の交代についての議論があり、長年代議員を務めてきていただいた笹川正樹（11回）、八木文雄（20回）、広野澄雄（22回）の方々から新しく石井一也（31回）、吉田保夫（33回）、伊皆嘉樹（38回）の方々への交代が了承されました。長い間支部活動にご尽力いただきました3名の皆様には、この場を借りて御礼申し上げますとともに、新しく代議員になりました3名の皆様には今後よろしくお願いいたします

なお、10月の在校生と卒業生との懇談会の講師の選任に毎年苦勞をしております。自薦他薦は問いませんので、候補者を事務局まで連絡していただけると大変ありがたいです。よろしくお願いいたします。

物 理 学 科

支部長 麴沢 祐一

支部長2年目ということですが、いろいろとご迷惑をおかけしております。ご支援どうもありがとうございます。

物理支部は、例年通り、理学部物理学科の支援として、今年6月7日のケルビン祭で表彰される学生に副賞として、1万円の図書券を3人に贈呈しました。また、チームチーチチングに対して2万円の援助をしています。今年はプログラム長である吉森明先生から依頼を受けまして、担当の大坪先生に当日手渡ししました。

支部としましては、大坪先生ともお話ししましたが、物理学を学ぶ学生に対してより支援をしていきたいと考えております。これからもどうかよろしく願います。

化 学 科

支部長 畠野 弘通

役員の方々にご協力をいただき、理学部同窓会代議員会や総会、全学同窓会交流会などに参加してまいりました。学生や会員の皆さま向けに、大学と協同で、新しい行事を企画中です。皆様からご提案があれば、予算の範囲で、お受けいたします。事務局を通して、お尋ねいただければ幸いです。

代議員会では、昨年度同様、理学部長から「理学科」、「主専攻プログラム」等の実施状況の説明がありました。「理学科」への改革が浸透するため、まずは、高大連携事業に一層協力していきたいと感じました。

大学は、今後も、変革・競争を迫られています。全国的には、将来、私大との学部統合の文科省案、ニュースもあります。会員の皆様方には、学部行事にご参加いただくなど、今後とも、ご支援、ご協力をお願いいたします。

生 物 学 科

支部長 荒木 勉

同窓生の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

いつものことながら活動数・事業数が少なく恐縮しております。

皆様はすでにご存じでしょうが、新大理学部は、昨年度から1学部1学科へと大幅に改組を行いました。しかし、大学の努力にもかかわらず、高校現場にしっかりと浸透しているとはいえず、生物学科の先生方や私も同窓会にまで多くの質問が寄せられました。そこで一昨年、昨年と同窓会生物学科支部が主催して、「高校の生物教員と理学部生物学科教員との交流会」を名称として、学部改組について特に生物学科の変更点の説明と、現教育課程が大幅に分子生物学的な内容にシフトしていることから教科書の内容に関するセミナーをも開催いたしました。この2回の会合では、高校教員30名ほどお集まりいただき、併せて生物学科の先生方との懇親会も行うことができ、皆様方から良かったとの感想をいただきました。ただ、高校現場は、年々忙しさが増すばかりのようで、夏休み中の開催でしたが忙し過ぎて参加できないとの連絡も多くありました。

今年4月の入学生で、学部生の半分が改組後の学生になったということで、学生の考えや行動、また将来への志望などにどのような変化があるかなど、興味がつきないところでもあります。今年度は、1回生が専攻プログラムを決定する秋以降に、同じような内容で交流会の事業を開催するか検討中です。

なお、同窓会としては、生物学科支部などの各学科支部を存続させるかまたは一本化するかについても新たな検討課題になっております。

どちらにしろ、生物学科支部の日常の活動の幅をどのように広げていくか、同窓会と同窓生、院生、学生、生物学科の先生方などとの交流や親睦をどう図っていくか、まだまだ悩ましい日々が続いております。



地質科学科

支部長 田澤 純一

「卒業生と在校生の集い」が昨年10月22日に開かれ、堀(本田)万葉香・松永京子(55回卒、㈱村尾技研)、川崎(高橋)美穂(46回卒、新潟県庁)、横山一輝(50回卒、日特建設㈱)が職場紹介をしました。今回は地質コンサルタントと官庁で働いている卒業生が話されました。いずれもフィールドワークが重視される場所ですが、それぞれ特徴があり、これから進路を考えていく在校生にとって参考になったと思われます。また、同じ会場で12件の職場紹介(ポスター発表)がありました。前日は在校生との飲み会「秘酔」が理学部玄関前で開かれました。

「新年会」は、今年2月17日に関屋田町の「力鰯」で開かれました(出席者15名)。初めに田村幹事長の支部活動報告、田澤支部長の挨拶があり、次いで一同、自己紹介と近況報告をしました。今回は、元・現教員として島津・松岡両先生が出席されました。

平成30年度の「土木地質学」は下村博之氏(33回卒、㈱パスコ)が担当します。

いよいよ9月末に2年次の学生が各専攻プログラムに振り分けられることになります。今のところ“地質科学教育プログラム”には約20名が希望しているとのこと、従来の人数(25名)とあまり変わらないようになりそうです、しかし“地質科学科”が消滅したことにより、今後学生の帰属意識“アイデンティティー”が希薄になるのではないかと危惧されます。最近のいわゆる“改革”によって学科がなくなった大学はほかに熊本大学理学部があるようですが、これからどうなっていくのか心配です。

自然環境科学科

支部長 尾原 祥弘

今年度も、例年と同じように、総会と懇親会の開催、後輩支援事業の2つを柱に活動しています。また現在、総会とともにスポーツ交流会や在学生向け就職講演会等の開催を役員・幹事一同企画しています。この会報と一緒に会員の皆様のもとへお知らせできるかと思いますので、同封されてくるお知らせをご覧ください、ぜひご参加ください。また、今年度より理学部同窓会を通じた資料送付になっておりますが、幹事の負担軽減のためご理解頂きますようよろしくお願いします。

昨年の総会後に行われた懇親会では、特に最近卒業したばかりの同窓生が元気に盛り上げてくれ、若いパワーのおかげで大変盛況でした。

また、ここ数年ずっと行っています在学生向けの就職支援講演会も定着して参りました。今後こうした活動が後輩支援事業の軸となっていくものと思いますので、会員の皆様に講師をご依頼することもあるかと思いますが、ぜひともご協力をお願いします。

さて、今年で18回目の総会になります。もうすぐ20回目の創環会総会、昨年もこの場で募集しましたが、第20回記念の総会・懇親会の実行委員会と一緒にやって下さる方を募集しております。若手に負けずベテラン勢も奮って立候補お願い致します。

最後になりますが、今後も同窓会の活動にご理解とご協力をよろしくお願いします。

若手卒業生 から (実社会に出て)

数学科

平成30年卒 渡邊 寛紀



私は現在、IT系の企業でセキュリティに関する業務をしています。6月末までは研修期間で、これから徐々に実務を担当していきます。研修中は大学では聞いたことがない言葉をたくさん耳にしました。1から勉強することになったので、理解するのに苦労しました。逆に大学で研究していたことが、IT分野のAI技術に使われていることを知り驚いたこともあります。私は大学で最適化について研究してい

ました。研究をしていた時は、研究の内容がどんなことに使われているか興味はありませんでしたが、今になって興味のある分野になりました。まだまだどんな仕事をしていくのかわかりませんが、興味を持って取り組んでいきたいです。

物理学科

平成30年卒 佐藤 桃子

私は物理学科を卒業して、食品メーカーに勤めています。

現在は、工場のライン改善に向けた試験をしています。工場で汗だくで、サンプル作りをしたり、菌の培養をしています。

働いて気づいたことが2つあります。1つ目は、論理的思考の大切さです。

微生物など、学んだことのない分野の仕事が多く、一からの勉強で大変苦労しています。しかし物理で培った論理的思考力は、数々の場面で役立っています。

2つ目は体力の大切さです。

入社直後に熱を出してしまいました。仕事は休みませんでしたでしたが、業務のペースが落ちてしまいました。この時、常に全力で働けるよう、体力が必要であると痛感しました。

失敗が続いて落ち込む日もありますが、前向きに仕事に取り組んでいきたいと思っています。



化学科

平成28年卒 石綿 健汰



私は今、大学院の自然科学研究科を卒業して化学メーカーで働き始めています。入社してからの1、2ヶ月間は、製造現場の研修として三交代勤務を行ってきました。製造現場では、大学の研究と同じような有機化学の反応を何百リットルものスケールで反応させており、大学と会社でのスケールの違いを身をもって

体験できました。大学の研究と全く同じということはありますが、大学で学んだ知識が活かせる仕事に就くことができ大変嬉しく思っています。最近ようやく研修が終わって研究所に本配属され、これから本格的な仕事が始まっていきます。まだまだわからないことだらけですが、いち早く一人前の研究者になれるように頑張っていきたいです。

生物学科

平成29年卒 原 真琴

理学部生物学科を卒業して1年が経ちました。私は現在、糸魚川市職員として税金の課税に関する業務に携わっています。税金は市民生活に直結する大切な財源ですが、市民の関心事でもあり各種意見もよせられ

ます。私は責任を感じながら日々の業務に取り組んでいます。また、現在の業務では、生物学科で学んだ知識や技術を活かせる場面はほとんどありませんが、大学で経験したことが今の生活に繋がっていると感ずることが多くあります。大学に通わせてくれた両親には感謝の気持ちでいっぱいです。私の地元である糸魚川市は、平成28年12月22日に大規模火災があり、現在も復興に向かってる最中です。市の職員として、自分の与えられた立場から糸魚川市を盛り上げていけるよう頑張りたいと思います。



地質科学科

平成28年卒 村松 樹

私は新潟大学理学部地質科学科及び同大学院を卒業後、総合建設コンサルタントである八千代エンジニアリング株式会社に就職し、社会資本整備を地質部門から支える仕事に従事しています。世界でも有数の火山・地震大国という特異な地質的背景を持つ日本では、応用地質学や地盤工学が防災やダム・トンネル等の大規模構造物建設時に果たす役割は大きいです。そして、その技術を支えるのは、私が新潟大学で学生時代に学んだ地質学（理学）の基礎知識である、岩石の種類を判別してその特性を考えたり、地層の走行傾斜を計測して地下の構造を明らかにするといった業務の中で深く実感します。社会人になってからも、学生の時と変わ



らず日々勉強の毎日ですが、「地球って面白い、地下の構造はどうなっているのだろう?」といった学生時代から持ち続けている興味」と、「同じ学び舎の仲間と共に、何度も山に繰り出して養った、地質を視る目」を武器に、一人前の技術者を目指して精進していきたいと思います。

自然環境科学科

平成28年卒 山家 雅人

月日が経つのは早いもので、新潟大学大学院を卒業してから3ヶ月が経ちました。今でも楽しい仲間と充実した日々を過ごしたことを昨日のことのように感じます。現在、私はエアコンの設計・製造する企業に勤務しています。今は研修期間中で、冷暖房の原理や機能、セールスポイントなどを学びつつ、製造現場や販売実習を通して、エアコンが使われるまでの作る・売る・設置する大変さを痛感しています。なかでも現場の上長さんから学ぶことは多く、人との繋がりを大切にすること、仕

事はもちろん人生も楽しむことなど、技術者としてだけでなく、人としても成長していると感じます。まだ、やりがいよりも自分の未熟さを感じる日が多いですが、早く立派な社会人になれるよう精進していきます。



特別後援会報告

5月14日(月)午後4時30分から、新入生対象の「特別講演会」を理学部同窓会主催で開催いたしました。これは、理学部が一学科に改組されたことを受け、理学系にはどのような進路があるかの一面を、新入生にガイダンスする目的で行いました。

今年は、生物学科2009年卒業の神澤秀明さん(国立科学博物館人類研究部研究員・博士)に、今話題の、「DNAから見た日本人の起源と成立」の演題でお話いただきました。日本の古代人、特に縄文人時代の古代DNAについて、現在の到達点について解

説していただきました。この話は、特に苦労話を神澤さんの大学院時代(総合研究大学院大学後期課程)の恩師、斎藤成也先生の著書「日本人の源流」(河出書房新社)の第三章に斎藤先生が紹介しています。是非、ご覧になってください。



表3 理学部同窓会整備・振興寄付金

拠出者御芳名(敬称略)

平成30年6月現在

● 数学科

戸井田 正	井上 昭導	原 幸仁	角井 伸一
岩原 侑	高橋 哲夫	那須野 恭子	牛丸 智博
田中 茂郎	荒木 恒雄	青木 孝史	阿部 貴
阿部千鶴子	五十嵐隆夫	竹内 正文	伊藤 達也
堀 道一	本家 武子	浅野 学	伊藤 尚之
吉川 益男	井村 悦子	細野 晃	小山 宏文
伊藤 通明	石田 雅義	武藤 好伸	笠原 宏文
小田 武夫	加藤 俊男	高木 稔	江村英里花
松村 芳郎	安藤 勝美	鈴木 哲	玉田 鉄平
寺澤 達雄	山口 真理	田中 環	武田 宏樹
樋浦 卓嘉	田中 宏	仁瓶 静男	関野 文瀬
寺尾 芳樹	伊東 孝芳	佐藤 浩一	佐々木 潔朗
金子 正義	日比登史男	佐藤 博人	本間 成和
	吉成 毅	中井 良	高橋 峰洋

● 化学科

鈴木 俊雄	松尾 昭夫	星野 洋子	重富 潤一
片桐 啓三	奥山 弘文	島野 弘通	沼崎 恭子
渡辺 初男	鈴木 信義	工藤 久昭	金子 洋介
森谷 和子	富士盛良一	福島 幹雄	赤間 智也
梅澤 貞雄	谷川 英二	本間 悟	中村 正名
柴木 俊子	青木 義夫	一関 雅裕	中村 千恵
長尾 典	村松 信輔	谷口 和史	安田健一郎
三屋 彰	宮下 育子	羽深 等	近藤健一郎
村川 忠司	吉川 義雄	村山 茂子	山田 幹
松澤 澄江	長谷川周壽	高橋 邦明	高橋 聖美
佐藤 茂司	水野 泰隆	青柳 義昭	渡辺 勲
永井 清	鈴木 澄廣	三ツ寄敏雄	松岡美紗子
伊古田仁司	富永 泰子	松尾 和浩	井上 和也
後藤 邦男	土屋真知子	橋本 雅文	根岸 裕太
石塚 紀夫	飛鳥 滋	青崎 匡臣	長谷川 優
半田 進	齋藤 清	渡辺 順一	氏家 葵
赤沢 宏	山崎 俊雄	斎藤 博之	松本かえで

● 自然環境科学科

天笠 泉 齋藤 真穂

● 物理学科

加藤 義雄	多田 健一	藤井 博	石川富二男
駒野 庄平	関 正忠	垣内 信夫	川田 尚
森山 久夫	松本 一男	後藤 直樹	佐藤 清悦
貝沼 次郎	小林 憲雄	白川 保憲	工藤 幸人
金井 芳夫	座馬 治泰	高木 広道	矢野伊左夫
高橋庄次郎	本間 正宣	原 俊一	加藤 和利
鈴木 政光	伊藤 繁夫	上林 晋	木村 祐伸
田中 務	橋本 俊彦	佐藤 一昭	風間 睦男
小池 秀雄	小林 仁	中村 孝雄	佐藤 修
岡崎 雅典	田中 清隆	渋谷 昌基	伊藤 静香
丹治 登	渡辺 孝一	高見沢 一男	伊藤 克
土田 哲昌	渡辺 俊英	鈴木 俊男	鈴木 瑞枝
中川 清司	多々良 学	斎藤 仁憲	山崎美穂子
畑野		前田	本田 瑞枝

● 生物学科

武田 信昭	北田 泰之	長谷川英男	高須 俊克
南雲 光雄	前川 盛治	正田 豊	笹川 通博
平林 宗昭	長谷川 博	山本 雅子	伊藤 達朗
高橋 宗昭	清水 栄一	林 正栄	藤原 信一
富所 利次	大滝 照成	阿知和聖二	高橋直一郎
伊東 信忠	天谷 信忠	富永 弘	頼所 裕史
内田 善昭	星野嘉恵子	石坂 均	榎本喜美子
小林 道頼	細野 正道	工藤 秀人	門脇 康之

● 地質科学科

倉又 孝夫 山野井 徹 伊豫田成子 杉原真与子 松永 聖子

武田 信昭	北田 泰之	長谷川英男	高須 俊克
南雲 光雄	前川 盛治	正田 豊	笹川 通博
平林 宗昭	長谷川 博	山本 雅子	伊藤 達朗
高橋 宗昭	清水 栄一	林 正栄	藤原 信一
富所 利次	大滝 照成	阿知和聖二	高橋直一郎
伊東 信忠	天谷 信忠	富永 弘	頼所 裕史
内田 善昭	星野嘉恵子	石坂 均	榎本喜美子
小林 道頼	細野 正道	工藤 秀人	門脇 康之

武田 信昭	北田 泰之	長谷川英男	高須 俊克
南雲 光雄	前川 盛治	正田 豊	笹川 通博
平林 宗昭	長谷川 博	山本 雅子	伊藤 達朗
高橋 宗昭	清水 栄一	林 正栄	藤原 信一
富所 利次	大滝 照成	阿知和聖二	高橋直一郎
伊東 信忠	天谷 信忠	富永 弘	頼所 裕史
内田 善昭	星野嘉恵子	石坂 均	榎本喜美子
小林 道頼	細野 正道	工藤 秀人	門脇 康之

伊豫田成子 杉原真与子 松永 聖子
深澤 光 橋詰 隆美 関根 正道
葛田 靖志 大河内 誠 田利信二朗
関谷 一義 田中 力 小川 乃絵
佐藤 朋彦 杉山 和稔 笠原 俊明
飯野 芳則 柿崎 聡 真鍋 達郎
小山内康人 佐藤 壽則 鈴木 春香
稲葉 充 富加見昌孝 渡部 直喜
稲葉 充 渡部 武敏 榎本

表1

平成29年度 理学部同窓会決算

一般会計

	費 目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説 明
収入の部	終 身 会 費 ・ 寄 付 金	5,000,000	5,079,000	79,000	
	終 身 会 費	4,000,000	4,140,000	140,000	207名×20,000円
	寄 付 金 等	1,000,000	939,000	-61,000	整備・振興寄付金 272名
	雑 収 入	78,000	106,777	28,777	全学同窓会資料同梱発送費清算、等
	繰 越 金	867,909	867,909	0	
	合 計	5,945,909	6,053,686	107,777	

	費 目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説 明
支出の部	会 議 費	150,000	118,212	-31,788	諸会議交通費等
	広 報 費	1,666,700	1,641,520	-25,180	
	「会報」発行費用	401,000	374,220	-26,780	「会報18号」7500部
	「理学部は今」発行費用	380,000	396,900	16,900	同窓会分7000部
		880,000	864,865	-15,135	6562名分
	そ の 他	5,700	5,535	-165	HP運営費
	事 業 費	1,120,000	1,119,917	-83	
	理学部支援事業費	700000	710000	10,000	グローバル人材育成推進事業補助、卒業祝賀会補助
	支部事業補助費	400000	367400	-32,600	生物、数学、自然環境科学、地質科学 各学科支部へ補助
	名簿編集費	20,000	0	-20,000	
	その他事業費		42,517	42,517	
	負 担 金 等	489,350	489,350	0	全学同窓会賦課金
	支 部 交 付 金	460,000	460,000	0	6支部 及び首都圏支部
	事 務 諸 経 費	85,000	80,788	-4,212	光熱水費、消耗品等
	事 務 局 費	400,000	370,500	-29,500	事務局人件費
	人 件 費	200,000	192,000	-8,000	後援会パート手当
	予 備 費	374,859	0	-374,859	
	他 会 計 操 出 金	1,000,000	0	-1,000,000	
	次 年 度 繰 越 金	0	1,581,399	1,581,399	内、1,000,000は29年度分積立金で次年度当初に執行済み
	合 計	5,945,909	6,053,686	107,777	

積立金特別会計

	費 目	収入	支出	残 金	説 明
特別会計	繰 越 金	14,000,000		14,000,000	定期預金
	H29年度積立金・利息	85		85	定期利息の内、定期元金に振替えられる部分 他は一般会計へ
	合 計	14,000,085	0	14,000,085	

表2

平成30年度 理学部同窓会予算

一般会計

※前年度とは費目の配列が一部変更されています。内容は同じです。

	費 目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説 明
収入の部	終 身 会 費 ・ 寄 付 金	5,000,000	5,000,000	0	
	終 身 会 費	4,000,000	4,000,000		入学定員200名×20,000円
	寄 付 金	1,000,000	1,000,000		同窓会整備・振興寄付金等
	雑 収 入	78,000	78,000	0	全学同窓会発送費清算等
	繰 越 金	867,909	1,581,399	713,490	
	合 計	5,945,909	6,659,399	713,490	

	費 目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説 明
支出の部	会 議 費	150,000	150,000	0	諸会議交通費、会場費等
	広 報 費	1,666,700	1,691,700	45,000	
	「会報」発行費用	401,000	400,000	-1,000	
	「理学部は今」発行費用	380,000	400,000	20,000	
	会 員 宛 配 送 費	880,000	906,000	26,000	会報等郵送料・運賃等
	そ の 他	5,700	5,700	0	HP運営費
	事 業 費	1,120,000	1,265,000	145,000	
	理学部支援事業費	700,000	720,000	20,000	グローバル人材育成推進事業補助、卒業祝賀会補助
	支部事業補助費	400,000	450,000	50,000	
	名簿編集事業費	20,000	20,000	0	
	そ の 他	0	75,000	75,000	
	負 担 金 等	489,350	489,350	0	全学同窓会賦課金
	支 部 交 付 金	460,000	460,000	0	6支部 及び 首都圏支部
	事 務 諸 経 費	85,000	85,000	0	光熱水費、消耗品等
	事 務 局 費	400,000	400,000	0	事務局人件費
	人 件 費	200,000	200,000	0	後援会パート手当
	予 備 費	374,859	418,349	43,490	調整費
	他 会 計 操 出 金	1,000,000	1,500,000	500,000	30年度積立金
	合 計	5,945,909	6,659,399	713,490	

特別会計

	費 目	収入	支出	残 金	説 明
特別会計	H29年度までの繰越金	14,000,085	0	14,000,085	
	H30年度積立金	1,500,000	0	1,500,000	
	合 計	15,500,085	0	15,500,085	

事務局より

1、理学部同窓会「役員会・代議員会合同会議」開催

平成30年6月17日(日)駅南キャンパス「ときめいと」において開催

◎議 事

- (1) 平成29年度事業報告・度決算報告(別表1)
- (2) 平成29年度会計監査報告
 - ・事業報告及び決算報告・会計監査は報告のとおり承認
- (3) 平成30年度事業計画・平成30年度予算(案)(別表2)
 - ・提案のとおり承認
- (4) その他

2、平成29年度事業報告

- (1) 広報活動
 - ・正会員に会報18号はじめ雪華などの広報紙を送付
- (2) 理学部からの要請にもとづく各種支援
 - ・理学部卒業祝賀会の経費を補助
 - ・グローバル人材育プログラムへの支援
 - ・高大連携アドバイザー支援
- (3) 全学同窓会との連携について
 - ・賦課金・分担金を応分負担し、財政的に貢献した
 - ・理事会、運営委員会に参加し、運営に貢献した
- (4) 会費及び寄付金について
 - ・後援会と連携し、平成28年度新入生より会費を徴収した
 - ・財政力強化のため「同窓会整備・振興寄付金」のお願いにより、多くの正会員よりご寄付を頂いた(別表3)
- (5) 特別講演会
平成29年10月6日(金) 16:30~18:00
於 新潟大学附属中央図書館
ライブラリー ホール(1階)
新潟大学名誉教授 工藤 久昭(23回生)
「113番元素ニホニウム」

平成30年度(2018年度)理学部同窓会役員名簿

役職	支 部	氏 名	役職	支 部	氏 名
会 長	物 理 学 科	野本 憲雄	幹 事	化 学 科	本間 悟
副会長	数 学 科	武石 文雄			田辺 薫
	物 理 学 科	麿沢 祐一			清水 榮一
	化 学 科	畠野 弘通		生 物 学 科	長谷川 博
	生 物 学 科	荒木 勉			堀 昌明
	地質科学科	田澤 純一			田村 伸夫
	自然環境科学科	尾原 祥弘		地質科学科	豊島 剛志
	首 都 圏	矢口たみ江			渡部 直喜
幹事長	地質科学科	渡部 直喜			畑澤 尚宏
幹 事	数 学 科	樋浦 卓嘉		自然環境科学科	加藤 直之
		武石 文雄			永井 宏明
		田 中 環			矢口たみ江
	物 理 学 科	鈴木 重行		首 都 圏	安藤 勝利
		坂井 章			飛鳥 滋
		笹川 民雄	監 事	物 理 学 科	岩見 敏明
	化 学 科	三ッ寄敏雄		生 物 学 科	藤間 真紀

転退職された先生(平成30年3月に)

化学プログラム 大江 一弘(助教)

平成25年2月~平成29年11月
(2015年2月~2017年11月)
在職期間:5年
専門分野:核・放射化学
転出先:大阪大学

新潟大学理学部同窓会(事務局)

住 所 〒950-2181
新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部内
T E L 025-262-6261 F A X 025-262-6261
E-mail ridoso@ad.sc.niigata-u.ac.jp
U R L http://www.ridoso.jp/

◆編集後記◆

第19号の編集は生物学科支部が担当させていただきました。
今号の表紙写真は佐渡市達者海岸にある新潟大学理学部附属臨海実験所です。発足当時と改築後の建屋の写真を並べました。現在では更に周辺部の整備が進み大きな堤防で囲まれています。
臨海実験所は前野貢理学部長の寄稿にあるとおり、来年度から組織が「理学部附属」から、「(仮称)佐渡自然共生科学センター」に位置づけられることが検討されています。お忙しい中、原稿を執筆していただいた皆様にこの場をお借りしまして御礼申し上げます。どうも有難うございました。